研究ノート

国民的トラウマを描く物語

―マルティン・アレイダの短編と歴史の語り―

愛知県立大学多文化共生研究所・客員研究員
神田外語大学・講師
高地 薫

灰色の夜

マルティン・アレイダ（高地 薫 訳）

バラパン駅[1]で下車してから一時間、今カマルディン・アルマダはモジョという地域で、ソロ川の堤の上に立ち、向こう岸に渡してくれる船を待っている。朝の風に撫ぜられ、凍えて震える彼の足元を、川は激しく流れている。

カマル〔カマルディン〕がそこに足を運んだのは初めてだった。

行く先はソロユダン。ここからどれほど遠いのかも知らない村だ。この堤に立ち、東を向いたとして、その村はどこにあるのだろう？　それも彼には分からなかった。けれども、パルティニ・ムルヨラハルジョは数日前の手紙にわざわざこう書いている。

> …モジョの船着場に着いて、ソロ川を渡ったら、東へと道が延びているわ。その道を道なりに進んで。だいたい五百メートルくらい歩くと右に曲る道があるの。そこで右に曲って。この道は曲りくねっているから、ぼうっとしないで気をつけて進んでね。間違いがなければ、三十分後には苔生した石の門が見えるでしょう。早朝に着くのなら、お日様は一枚の葉に遮られることもなく、明るく照りつけているわ。見渡す限り目に入るのはただただ田圃、田圃ばかりよ。そして右を見て、あなた、ここがあなたの妻が待つ村、ソロユダンよ。ここで会った人たちに、亡くなった父ムルヨハルジョの名前を伝えて。そうすれば彼らがあなたを家まで案内してくれるわ。

八年前に彼は生まれ故郷、アサハン[2]にある小さな町を出た。父と母を残して、彼の目的は自由だった。彼がその道を選んだのは、封建的で狂信的な家族環境のためだった。当初アルマダは、サバンの港や、サンブ、タラカン、スンバワ、タニンバル、メラウケ、そしてダーウィン港に停泊すると、船乗りの自由に喜びを見出した。新しい港に寄る度、新しい航海に出る度、そこに彼は喜びを見付けたのだった。

1　中部ジャワの古都ソロにある駅。

2　北スマトラの県。

しかし、今日、このソロ川の堤では、新たな土地に踏み込んだときに船乗りが抱く喜びは、もう彼の心に浮かばなかった。そして、そのような生活の繰返しのなかに喜びはもはや見出せないと彼は思っていた。彼はもう二十九になっていた。

川の水は彼の足元を激しく流れていた。川沿いに生えている竹の葉は風に吹かれてざわめいていた。渡船はもう下の船着場に着いた。先程から待っていたアルマダとほかの十数人は、すぐに堤を降り、船に乗った。

乗客のなかに、茶がかった黄色の制服を着てペチ〔イスラム帽〕をかぶり、鞄を手にぶらさげた男がいた。ほかには、商人、農民、そしてカマルディン・アルマダ自身だけだった。船はシャツを着ていない二人の男が棹さしていた。彼らは寒くないようだった。十分もたたずに船は対岸に着いた。アルマダは十ルピアを出し、その船の船頭に渡した。

「支払いは上ですよ、お客さん。」その船頭は強いジャワ訛りのインドネシア語で答えた。

「あぁ…。」アルマダは自分の間違いに気付いた。

他の乗客はもう堤の上にいた。そこには、ワルン〔屋台〕と並んでひとつの小屋があり、そこで船賃五ルピアを払うのだった。

アルマダの前には東へと道が、その日の朝には消えかけて赤く霞んだ火の玉のように見えた太陽に向かうかのごとく、延びていた。どうやらこれがその道だな、と彼は思った。

その道は川砂利で固められもせず、ましてやアスファルトで舗装されてなどいなかった。地面は黄がかった白色をしていた。道端には自転車に乗った男が二三人と籠を背負って歩く女が数人見えた。彼らは皆こちらに、船着場に向っていた。一方、こちらではもう大勢が渡船を待っていた。ここでの朝の生活はこういうものなのだ。そしてアルマダは歩みを進めた。

「お先に失礼。」彼は追い越しがけに、先程船で一緒だった制服とペチ姿の男性に声をかけた。その人にだけ追い抜かすことを詫びた。ほかの人にはしなかった。その人たちを敬わなかったからではない。そうではない。ただ彼が恐れたのは、自分の言葉を理解してもらえないことだった。彼らがまだ自分の知らない言葉で返事をするのが怖かった。彼らを追い越すときアルマダは、顔を向け、ちょっと微笑みながらおじぎした。彼らはその彼の身振りに「インギィ、モンゴ（ええ、どうぞ〔ジャワ語〕）」と、彼の耳に心地良く響くことばで返すのだった。

ペチと制服姿で鞄を持った男は、おそらく村の視察に役場から送られた官吏か、あるいは村の教師だとアルマダは考えた。もし彼がそういう仕事をしているのなら、当然アルマダの使う言葉を理解するだろう。

「あぁ、えぇ、どうぞ。」その人はことばを継いだ。「どちらへ行かれるのですか、そんなに急いで。」

アルマダは歩みを緩めた。

「ソロユダンです。」

「そちらに住んでいらっしゃるんですか？」

「いいえ。」

彼はそのペチを被った男に更に近付いて歩いた。お互いの肩が触れそうなくらいに。アルマダは歩調をその男に合わせた。

「どちらから？」

「ジャカルタです。」

その男はアルマダを見た。その顔の表情には、ひとつの衝動、好奇心が見てとれた。アルマダは歩み続けた。
「ジャカルタですか」
「えぇ、ジャカルタです。」
「ソロユダンにはご家族に会いに？」
「いいえ。家族になる人たちのところに行こうと。」
その男は微笑んだが、作った笑みだった。好奇心が膨らんだことは、表情から見てとれた。
「家族になる人たちのところへ行く」彼はアルマダのことばを繰返した。「どういうことですか？」
「えぇ、まだ僕の家族になっていない人たちのところに行くんです。でも、じきに僕の家族になるんです。」
「つまり、婚約者のところに行くんですね？」
「その通りです。」
アルマダは小さく笑った。その男も笑った、心から笑った。彼の並びの良い、真っ白な歯が見えた。それからアルマダは名を名乗った。その男もまた自分の名を告げた。彼らは歩きながら、挨拶を交した。
「あなたはどちらへ行かれるのですか？」
「ラバンです」その男は答え、逆に尋ねた。「ソロユダンに行くのは何度目になりますか？」
「これが初めてなんです。」
「どうやってここまでやって来ることができたのですか？　ましてソロユダンはただの農村ですよ？」
「僕の婚約者が手紙を送ってくれました。その手紙で、バラパン駅からソロユダン村までの道順を教えてくれたんです。」
「あぁ…。」その整った服装をした男の表情にちょっとした敬意が浮かんだ。
「ラバンはここからまだ遠いのですか？」
「ソロユダンよりも遠いですよ。私もソロユダンを通りますから、一緒に行きましょう。」
「それは有り難い。ありがとうございます。たまたま行き合わせただけなのに…。」
彼らは歩き続けた。道の先、本当の先の先、つまり青い空の下方では、太陽はもはや消えかけた火の玉ではなく、ギラつく光の中心になっていた。アルマダは体が暖くなるのを感じた。あぁ、なんと気持ちが良いのだろう。
「もしよろしければ、あなたの婚約者が誰か教えてくださいませんか？」
その男は目で敬意を示しながらアルマダを見た。目はまた、彼の好奇心で気分を害したのなら申し分けないと語っていた。しかし、何が申し訳なかろうか、好奇心は誤ちではないのだから。その男の表情と目はまた、早急に答えを求めている訳ではないと語っていた。彼はさらに続けようとした。そして、「ラバンはこの地域の中心の村で、ソロユダンはその郊外になります。私はラバン村の助役をしています。」
この人は助役だったのだ、アルマダは心のなかで呟いた。こちらから尋ねずともあちらから話してくれた。村の助役と知り合いになるとはツイてる、と再び心のなかで呟いた。ここでは彼は尊敬される人物なのだろうと考えた。喜びで恥かしいとも思わず、アルマダは答えた。「パルティニです。」
「ご両親は？」

「パルティニ・ムルヨラハルジョという名前ですから、親はムルヨラハルジョという名前です。」

「ムルヨラハルジョ！」その男は半ば叫びつつ、アルマダの側から三歩ほど遠ざかった。彼は眉を顰めた。両の眉が眉間でくっ付きそうだった。その眼球には様々な種類の感情が湛たえられていた。恐怖、憎悪、畏敬、そして遺恨がそこで混ざり合っては、浮かびあがり、沈んでいった。

ムルヨラハルジョ！ムルヨラハルジョ！まるでその名前は、彼の表情に落された大きな石であるかのように、そこに激しい波を起こした。その波がゆっくりと落ち着いてゆき、さざ波になり、ついにはおさまってガラスのように透き通った水面となってから、ようやく彼はアルマダの脇に近寄った。互いの肩が触れ合うほどに。アルマダは、先程のことばがなにか悪かったのだと思い、許しを乞う目でその助役を見た。

「すみません、助役さん。どうしたのですか？」

「ムルヨラハルジョ…」助役は、ようやく落ち着いた表情をして、その表情と同じくらい落ち着いた声で繰返した。

「どうしたのですか？」アルマダは続けた。

「彼に会ったことはありますか？」

「いいえ。」

「彼は有名人ですよ。彼の村でだけではありません。このラバンだけでもありません。彼の名はスコハルジョ県中で、それどころかソロの町にまで届いています。共産党（Partai Komunis Indonesia, PKI）の指導下にあったのですから。ソロでは弁護士として、土地争議でインドネシア農民戦線（Barisan Tani Indonesia, BTI）の擁護をする人として知られています。彼の指導する人々に彼は敬愛されています。でも、多くの人民にとって不倶戴天の敵でもあるんです。私の敵でもある。私の敵でも…。裁判で彼は私の土地を横取りしたBTIを弁護した。彼は裁判官が判決を下す前に敗れました。九月三〇日事件が起こったのです。彼もまた消えました。バチャンで始末され、鶏の骸のように川に投げ捨てられたのです。」

あわてて、彼はアルマダを見た。「あぁ、すみません…申し訳ない。彼は、あなたの義父となる人ですね。許してください。」

彼はアルマダの肩を掴み、ゆっくりと揺った。

「申し訳ない、彼はあなたの義父だった。私を許してください。」彼は再度許しを請うた。「構いません。それが本当に真実ならば、どうしてあなたが僕に謝ることがありますか。」

「あなたはスマトラの出ですか？」

「そうです。アサハン出身です。メダンの近くの。」

「そうですか。スマトラの人は腹蔵がない。私はそういう姿勢が好きです。」さらにことばを続けた。あなたは、あなたの義父となる人がいなくなった…もういないことを知っていましたか？」

「えぇ、もう知っていました。」

「誰から聞きましたか？」

「パルティニからです。僕の婚約者、彼自身の娘から。」アルマダは静かに答えた。「彼女はこの地域の出ですが、率直な気質なのです。彼女は家族の状況についてすべてを話してくれました。父親のことについてはとくに話してくれました。父親は共産主義者だと。彼女がそう話したのは、敬意を示すためではなく、僕が判断するための事実としてです。彼女は隠し事をし

ないんです。これは、僕が好きな彼女の性格です。それもあって、僕の彼女への愛はいや増したのです。」

アルマダはしばし黙した。隣りを歩く村の助役を見た。

「ですから、あなたは先程のように僕に謝ることはないんです。パルティニは父親についてすべてを話してくれました。その話を、あなたの話と照らし合わせて確認しましょう。」

「亡くなった人の悪い点を掘り起こすのは良くありません。」

アルマダは押し黙った。助役もまたことばを続けなかった。アルマダは黙し、助役も黙した。ただ彼らは歩き続けた。ただ風が、道の左右で竹の葉をざわつかせた。

ふとアルマダは、右への曲がり口にいることに気付いた。太陽はいまや左側に昇り、竹林に遮られていた。この道をまっすぐ行けば、パルティニが書いたように、古い門に辿り着くはずだ、そう彼は心のなかで呟いた。その門がきっとソロユダン村の門なのだ、とまた心のなかで独り言ちた。

「どうやって彼女と知り合ったのですか？」その村の助役は尋ねた。

「以前、彼女はジャカルタの学校にいたんです。で、僕はその町の高級な通りの道端でガソリン売りをしていました。恋は盲目。恋は思案の外。このことばには真実があります。はじめは、僕たちのなかで、その出会いが今日まで続くと思った人間なんていませんでした。想像してみてください、この地方から来た彼女が、僕みたいな道端に埃のごとく吹き溜まった人間と出会ったんですよ。毎日埃にまみれていた僕と。ただ雨が、肥沃の象徴である雨が、ひき会わせてくれました。彼女が僕の屋台で雨宿りをしたんです。そのとき彼女は丁度学校から帰るところでした。ここから出会いから始まりました…。」

「九月三〇日事件から三ヶ月後、二つの理由から彼女は学校を辞めてここに戻らなければならなくなりました。一つは、彼女が家族の状態を不安に思ったこと。もう一つは、両親からの仕送りが来なくなったことです。僕も微力ながら助けてあげました。でも、この僕のように屋台で商売をしている人間のできることなんて、たかが知れています。彼女はここに戻ってきました。家族のもとへ。父親のいなくなった母親と弟妹のもとへ。そのときのパルティニの帰郷はどれほど辛いものだったでしょう。僕には、玄関先に立ち、寡婦となった母親、そして父無し子となった弟や妹に迎えられる彼女の姿が、目に浮かぶようです。」

「僕たちは連絡を続け、関係を深めました。文通を続けました。あなたには想像もつかないでしょう、僕がもうすぐ彼女に会えるこの喜びを。」

カマルディン・アルマダは、タメをつくって魅力的なことばを紡ごうしているかのように、しばらく口を閉じた。その助役は彼を優しく見つめた。その微笑みは、愛に燃える若者の心を宥めるために、作られたものだった。

「路上に吹き溜る塵のような僕が彼女の心のなかに居場所を得たのです。気高く、可愛い、そして率直な彼女が。僕は、彼女以外に、嘘をつかず、見せ掛けのない女性に会ったことがありません。」

「すみません、あなたに説教しているつもりはないんです。女性の嘘と見せ掛けは彼女たちの服装から分かります。まして口を開けば、そういう性質は明確に聞き取れてしまいます。」

アルマダはしばらく押し黙った。そして、唇に一輪の笑みを咲かせながら続けた。

「ついに僕たちは決心したのです。結婚することを。」

「御予定はいつですか？」

「僕が着いた二・三日あとです。パルティニの話では、母親も僕たちの結婚を早めるように言っているそうです。母親は、結婚後、僕が彼女の家に住み、田圃の手伝いをすることも望んでいます。式は簡素にするでしょう。」

その助役はただ黙っていた。アルマダは心の底から湧き上がる感情を逆らせるばかりだった。

「以前僕は船乗りでした。自由を求めて船乗りになったのです。初めはそのような自由のなかに喜びを見出せるのだと思っていました。一二年のあいだはそうでした。でもそれが過ぎると、飽きてきました。僕は、まるで自分自身を喪失したかのように感じたのです。」

「あなたのご両親は勤め人だったのですか？」と、その助役が話を切った。

「いいえ。商人でした。そして僕も抜け目ない商人になるように、そして狂信的ムスリムになるよう育てられました。厳格な規律を教え込まれたのです。大人になっても父親の拳骨を味わっていました。父と母の言い争いもしばしばでしたし、殴り合いの喧嘩もままありました。こうしたことは僕にひどい印象を残しました。そして最後に僕は逃げ出したのです。家出です。愛する母を残してきたのです。」

「ご両親とは何年会ってないのですか？」

「八年になります。」

「会いたいとは思わないのですか？」

「もちろん会いたいです。もちろん恋しいです。自分を生み育ててくれた母親を恋しく思わない人がいますか…。」

突然、彼の思いは厳しい父、心優しい母への思い出へと運ばれた。家出当初の日々を思い出した。彼のその計画を知っていたのは姉だけだった。涙を流しながら姉はアルマダが計画を取り止めるよう懇願した。姉の思いは彼に届かなかった。彼はもう逃げ出すのだ、家を出るのだと固く決心していたのだ…。

「今では、喜びとは責任だと思っているんです。」古い思い出がゆっくりと遠ざかり消えたあとで言った。

「僕は結婚する。一家の大黒柱になります。僕がその残された家族の責任を背負うようになるんです。かつては僕の妻の父親が背負った家族の重みを、僕自身が背負うのです。思うに、ここにこそ僕の喜びがあるんです。その責任を負うことこそが喜びなのです…。」

突如カマルは立ち止まり、深く考え込み、思考の淵へと潜っていった。

「でも、また僕は不安なんです。家長が共産主義者だった家族のなかに僕が入ることを、この村の人々が受入れてくれるでしょうか？」

助役は何の反応を示すこともなかった。表情はガラスのように凪いでいた。その落ち着きは、何かを隠し、秘密なままにするために作られたものだった。自分に関係することを、その助役が偽りの平穏の裏に隠していることを、カマルディン・アルマダが知るよしもなかった。

「助役さん」とアルマダは言う。助役は黙ったままだ。

「この地域がまだ不穏なことは分かっています。この地域は共産党の巣窟でしたから。手紙の一つにパルティニがそう書いていました。僕はまだ不安ですし、怖くもあります。結婚のあと、僕が若者たちの一団に連れ出されて、共産党の人たちが処刑されたように、殺されてしまうことも、あり得ない話じゃない。そして僕の死骸は川に放り捨てられるんです。多分、僕は連絡員、あるいはジャカルタからの逃亡者なのだと責められるのでしょう。でも、助役さん、共産主義者の子供と結婚するからと言って、僕たちまで共産主義者ということにはなりません。僕は、彼の

娘と結婚するのであって、彼女の父親と結婚する訳じゃありません。僕の婚約者の父親が、仮に生きていたとして、僕を娘婿として認めたかどうかも分かりません。」

カマルディン・アルマダはその助役を見た。彼はその男の心を奥まで掘り起こしたかった。その助役の意見を聞きたかった。そして、彼は助役の心を探ってみた。

「あなたの考えはいかがですか？　あなたはこの地域では力のある方だ。ただ、こうした不安は障害となるでしょうか？」

アルマダは耳を澄ました。しかし助役はまだ話さなかった。アルマダは彼を見つめた。そして、再びその助役の心を掘り起こそうとした。

「共産主義者の子供と結婚するからと言って、僕たちも共産主義者ということにはならないです。」と言った。

それでもその助役は口を開かない。彼の心は潜るには深すぎるかのように。顔にもまた何の反応も示す気配がなかった。

「子供と結婚するのであって、父親と結婚する訳じゃないんです。」カマルディン・アルマダはその助役を再び刺すように見た。突如、彼はその助役の表情に悲しみが刻まれるのを見た。その目はどこか分からない遠くの一点を見つめていた。カマルは待った。その助役が口を開くのを待った。ずいぶん経ってからその助役は話し始めた。

「あなたには感謝しなければなりません。こんな短い出会いのなかで、私はあなた個人について多くを知ることができたからです。それに、この地方出身の女性にあなたが示してくれた若者らしい敬意と責任感に対しても感謝します。」

助役はしばし黙った。

「あなたは強い心を持つ人です。うまく行かないことがあっても、そうそう気落ちしなければ良いのですが。」

アルマダは直ぐに割って入った。「僕たちが結婚する予定を延期すべきだということですか？　それは無理です。彼女の母親も強く望んでいます。僕たちは二人とももう心の準備ができています。延期するなんで出来ません。ただ僕は、この地域がまだ熱いので、不安なだけなんです。」

アルマダのことばを、その助役は聞いていないようだった。目はどこか分からない遠くの一点、消失点を見つめていた。

「そぅ…。」助役は呟いた。

彼は、苦しみ、呻きによって痛みを和らげようとしている人間のようだった。

「私はあなたに感謝しています。でも、あなたに会ったことで、罪を犯すことにもなりました。」

今度はその助役がアルマダを鋭い目で見た。その目には悔恨の念と寛恕を乞う気持ちが湛えられていた。杖を取られた盲目の人にように。アルマダは驚いて尋ねた。「どうして罪を犯したことになるのですか？」

「あなたの心を引き裂くであろう知らせを伝える最初の人間が、私だからです。一週間前、パルティニの家にジョグジャから逃げてきたPKIの人間、ムルヨラハルジョの兄が泊まっていることが知れました。その男は人々に撲殺されました。家は燃やされ灰となりました。」

その知らせを聞き、アルマダは驚愕した。助役は彼を長いあいだ見つめていた。悔恨の涙が彼のまぶたに溜っていた。彼の潤んだ目は煌めき、罪への赦しを乞うていた。

「助役さん…」アルマダは知らぬうちに呟いていた。

「パルティニと母親、弟や妹たちは…。」

助役の目から発せられる赦しを乞う光は鋭さを増し、アルマダに注がれた。彼にその目の光を受け止める力はなかった。彼は青ざめた。顔からは疑念が消え、悲しみが浮かんだ。

「そぅ…。」アルマダの口から、意識していないかのように、ふとことばが漏れた。

「人々に見境なんてありませんでした。何の考えもなく、長いあいだ押し殺されていた対立の怒りと恨みを逆らせたのです。こうしたことは理解できます。そのとき理性は捨て置かれ、怒りと恨みが支配したのです。パルティニと母親、弟や妹たちは犠牲者になりまいた。家に彼らの伯父、共産主義者がいたのですから。他の地域で共産主義者の家族がまとめて消えたようにです。ムルヨ夫人は字が読めないなんてこと構いやしません。パルティニや彼女の弟妹が政治には無知だったことなんて知ろうともしない。政治には分別なんてありません。彼らは川のほとりで一緒に消えました。」

「あぁ…。」アルマダは呟いた。頭のなかは滅茶滅茶になった。

視界が突然チカチカした。目の前の道は、揺れる巨大な紐のようだった。木々も揺れる。彼は目を瞑った。体が揺さぶられるようだった。彼が見るもの感じるものすべてが揺れていた。あらゆるものが揺れ、揺り動かされていた。助役がアルマダの肩を強くつかんで支え、その若者が地面に倒れ込まないように支えた。

「君、気を確かにしなさい。」

アルマダは助役に支えられて歩いた。よろよろしながら彼は道端に向かった。そこに石門があり、その柱の根本に彼は座った。

「それは全部本当のことですか？」彼は尋ねた。彼の心は刃で、その死の知らせがやって来るや否や切り付けてきた刃で切り刻まれていた。

「私はこのラバン村の助役です。人々の信頼を得て働いています。先程話したことはすべて本当に起こったことです。これが、あなたに対する私の罪なのです。この知らせを最初にあなたに伝えたのは私だから。赦してください。あなたは、ほんのしばらくの、偶然の出会いのなかで、ご自分の希望と自分自身の全部を話してくださいました。一方、私はこの悲しい知らせによってあなたの希望を押し潰してしまった。赦してください。」そして彼はアルマダの前に跪いた。彼は服の肩で涙を拭いた。

アルマダは全身から力が抜けてしまった。石柱にもたれかかった。すべての希望が消え去った。一家の大黒柱としての責任から感じるであろう喜びも、その訃報が彼の耳に届いたとき、霧散してしまった。彼は再び放浪者となるだろう。目的の海岸に決して着くことのない船乗りに。

彼はその石柱をつかみ、盲人のように撫ぜた。四メートルほど前に、別の石柱がぼんやりと見えた。彼はその石柱をずっと見つめていた。彼のもたれかかっている石柱と比べていた。同じだ。二本の石柱は道の両端に据えられているのだ。

彼は何かを思い出そうとした。程なく、彼は確かに思い出した。

「すみません…」彼はか弱く、ほとんど聞こえないほどの声で言った。「これがソロユダンに入る村の門ですか？」

「ええ、そこからソロユダンの村です。」助役は南西の方角を指し示した。木立の向うに二三軒の家の棟が覗いていた。

「あぁ…、これが僕の運命か。目的の海岸に到着することのない船乗り。」心の中で呟いた。彼はその古い石門を抱きながら啜り泣いた。

「あなたはまだ若い。まだたくさん時間があります。心を強く持ちなさい。」
アルマダは東のほうを見た。緑に染まった水田が見えた、海のように。その水田の海から突然、その一節の記憶が浮かんだ。
見渡す限り目に入るのはただただ田圃、田圃ばかりよ。そして右を見て、あなた、ここがあなたの妻が待つ村、ソロユダンよ。

彼の恋人の、いなくなってしまった父に先立たれた恋人の手紙の一節。
「もう日が高いです。あなたが集落に着くのが遅くなってしまいます。僕のことは放っておいてください。」若く、嘆き啜り泣いているアルマダは言った。
「構いません。あなたはここでは客人です。私たちは客となった人はすべて敬います。まして、あなたは遠方からいらっしゃった。そして…、そして不幸な知らせを受けたのです。あとであなたを隣組の組長の家に案内しましょう。そこで休んでくださって構いません。」
「でも、僕がこのあと会うのが焼け跡と灰だけならば、何の意味がありましょう。パルティニと母親のかって住んでいた家の灰を見るだけならば。」
「もし焼け跡と灰が悲しみと涙を増すばかりならば、そこには行かない方が良いです。私たちは隣組の組長の家に行くだけにしましょう。その家の前は通りません。この私たちの土地を離れる前に、ジャカルタに帰る前に、あなたはまず休息を取った方が良いと思うのです。あなたが疲れているのは確かだし、それに今は…、そう休息が必要ですよ。」

太陽は三時間前に地平線に消えた。ソロユダンから5キロほど南にあるバチャン橋から人気が消えはじめた。自転車に乗った幾らかの人がそこを通るだけだった。その橋は三時間前から暗くなっていた。ただその両端は電気に照らされていたが、光は弱く、石油ランプほども明るくなかった。中程には、欄干を握りながらカマルディン・アルマダが呆然とした目でソロ川を見詰めていた。唇は震えていた。彼はもう一時間ほどもそこに立っていた。通りかかる人も彼を構わなかった。左手には二枚の紙が握られ、その一つには 1966 年 3 月 2 日ソロユダンにてと記してあった。
彼の唇は震えつづけ、無言で動いていた。時々、呟きのように聞こえる声が漏れた。「パルティニ…パルティニ…」
突然彼は手に持っていた紙を破り、下に投げ捨てた。暗闇の中でその紙はただ白い塊のように水面へ落ち、急な流れに流され、そのままどこへとなく闇に消えた。
「君に受けた愛と敬意を僕はどこに返すのか。君と君の家族はもういない。君は大地に受入れてもらえないかのように、お参りする墓もない。父親が共産主義者だから。君の伯父が…。あぁ、パルティニ。」彼は、低く、小刻みに啜り泣いた。
ゆっくりと彼は顔を上げ、焦点の定まらない目を上げ、西を、キブラッの方向、ムスリムが祈る方向を見た。
「おぉ、神よ…」彼は長く叫び、あとはもっとも慈悲深い創造主への呟きばかりがあった。「パルティニや母親、父無し子となった弟や妹を殺した刀を振い、銃剣を突き、銃弾を放ったのは、もちろんあなたの手ではありません。違います。あなたではありません。あぁ神よ、慈悲深き神よ、我が恋人の罪と誤ちを赦したまえ。我が母と弟妹の罪を赦したまえ。僕は彼らのものなのです。

彼らは僕のものなのです。例えあなたがまだ僕たちを結婚させてくれていなくとも。僕たちを赦したまえ。赦したまえ、アッラー。」

彼はゆっくりと目を閉じ、頭を長々と垂れた。

しばらく後、カマルディン・アルマダは手を懐にすべり込ませた。突如、腰から一振りの短刀を抜いた。左腕に突き刺して引き切り、手首の動脈を断った。血が吹き出した。彼は血のついた短刀を首筋に突き立て、その短刀を下に引き、頚動脈を断ち、骨にまで達した。喉は引き裂かれた。血が喉から吹き出し、手首から吹き出した。血が生命を流す二本の動脈が切れた。切りさかれた。第三の突きは腹に落された。内臓が垂れ出た。大きく開いた三つの傷からありったけの血が迸った。

彼は泣いていなかった。静かに死の天使を待っていた。あたかも死があらゆる希望と目的の頂点であるかのように。その到来を嘆き悲しむべきではないものであるかのように。死とは生の終わりである。死は、喜びをもたらす自由を求める闘いの終焉である。例えその自由が苦しみに満ちた自由であったとしても。

彼の視界は暗くなり目が回った。橋が揺らされているかのようであった。彼は欄干に寄り掛った。最後の力が、血をだだ流す動脈の切り口から、彼の体を去っていった。

「あぁ…パルティニ、僕は君を追って逝くよ。」彼は最後の力を振り絞ってそのことばを発した。啜り泣きほども聞こえないことばを。

血が彼の服を濡らし、彼の体を濡らした。橋の荒れたアスファルトを濡らし、下を流れる水面にしたたり落ちた。

ついにその体は、それを満たしていた魂がどこかへ飛び去り、あらゆる力を失なった。それは、もうカマルディン・アルマダではなくなった。それは、死せる肉体に過ぎず、二つ折りになり、欄干にもたれ、そしてソロ川の流れへと落ちていった。

【初出】Martin Aleida, “Malam Kelabu,” *Horison*, tahun V nomor 2 (1970), hal.36-40, 60

デワンガのペンダント

マルティン・アレイダ（高地 薫訳）

突き刺す痛みに耐え、ベッドの上の女性は眉間に、化学療法におかされて薄くなった眉毛の間に皺を寄せた。痛みに耐えて顔を歪ませると、筋の通った鼻がさらに際立った。そして彼女は、垂れ下がる皮ばかりとなった瞼のうらに眼球を隠した。そこには、今はベッドの端に座り物思いに耽っている夫アブドゥラー・プルラックがかつて誉めそやした、カールした睫毛はあとかたもない。

苦しみを分かち合いたいという思いから、アブドゥラーは手を伸ばして妻の指をとり、二人の掌を重ね合わせた。夫の手に包まれて、その女性の指は温まった。夫の掌と指を流れる血の熱が伝える温かさだ。アブドゥラーはその重ねた手は同情を表わしているに過ぎないと気付いた。痛みは妻にしか分からないということは、どれほど彼を苦しめることか。そのベッドの端で、アブドゥラーは分別を失った一人の夫に過ぎなかった。どうやって妻と痛みを分かち合うべきか、もう彼には分からなかった。

窓の磨りガラスの内側に澱んだクロロフォルムの匂いと日の光が、心持ち屈んで、それから妻の頬と唇に幾度かくちづけをするアブドゥラーを包んだ。

その瞳。妻のその瞳…。あぁ、彼はまだ覚えている。三十年も昔、輝く真ん丸い二つの眼球を隠し閉じた目蓋に初めてついばむようにキスしたことを。彼ら二人の人生において、それ自体が支えとなってきた目。涸ることなく彼の敬意の源となってきた瞳。デワンガ・スチアティ、つまり後に彼の妻となる女性が、夫の口から溢れ迸る称賛に、しばしばどうすれば良いのか困ってしまうほどだった。彼の褒め称える言葉は、二人の子供が成人してからも変わることはなかった。けれども今、その官能的な瞼、睫毛、眼球は、妻を痛めつける病に対して二年前から積み重ねられてきた抵抗の残滓でしかなかった。

ベッドで横になっていた女はふいに目を覚ました。夫がまだベッドの端に座って看てくれていることを確かめるかのように、脇に目を遣った。その眼差しに気付き、アブドゥラーは握っている妻の手をもっと暖めようと指を動かした。震える微かな声で、しかし説いて聞かせるように、その女性は言った、「わたしにはまだ、あのことを聞くくらいの力はあるわ。後悔なんてしないから。話して、あなた…。今が、きっと良い時期だわ。」

その願いは夫の首をうなだれさせた。もう二週間以上、デワンガは、土気色の顔をして横になりながら、夫が本当に伝えたいことが彼の口から出てくるのを待っていた。一方、アブドゥラーの心の中には、二週間前ふと口を突いて出た言葉、妻が許すならば、結婚してからもずっと隠してきたあることを打ち明けたいという言葉を悔む気持ちがこみあげてきた。二週間前アブドゥラーは、まさに妻が病の痛みと格闘しているそのベッドの脇で、その約束をしたのだった。けれども言葉は、アブドゥラーの喉につかえたままだった。その願いは叶えられていなかった。言葉が彼の舌先で凍て付いていた。心の中に隠していたことを伝えるのは罪深いことだとアブドゥラーには感じられた。まだ心にしまってあるそのことばは、口から出してしまえば、目のまえで力なく横たわる妻の苦しみをより大きくしてしまうに違いないからだ。

けれども、妻の病との闘いがどれほど悲惨なものかを目の当たりにし、また妻が罹っている癌のステージが生きる気力よりも死にずっと近付いているため、生きる望みはもう薄いことを理

解したアブドゥラーは不安を抑え、三十年間伴侶となってきた妻に誠実にであろうという決心に達したのだ。「今だ！今こそ話すんだ！」心は叫んだ。何が起ころうとも、愛する妻デワンガは約束が守られぬまま死んではならない。彼女が逝かなくてはならないのなら、真綿ほど白い雲の浮かぶ青空とともに旅立たなければならない。

アブドゥラーは腰をずらし、唇を妻の耳に近付けた。そして、新たな証言をすると宣誓して、長い間隠してきた秘密を、病院の湿った白壁であろうとも聞いてはならぬ秘密を打ち明ける人間のように、ゆっくりとした声で、彼女に話した。優しげな様子から、病院の天井からは、アブドゥラーが長く会うことのなかった恋人に切ない想いを呟き、恋しさを吐露しているかのように見えた。再会してみたら、ベッドで独り身を横たえ、病魔と戦っていた恋人に語るように。そして、言葉を継ぐアブドゥラーの声の震えが聞こえてくる。

一九六五～一九六六

陸軍と左派勢力の政治的対立は、軍のあるグループが、国民を裏切り、また女性を侮蔑したと非難された将軍たちを拉致・殺害したことで、自ずと収束への道へと進んだ。しかし、その後に何が起きたのか、拉致事件の首謀者はその虐殺が行なわれたあとで何をすべきか突然右往左往した。その混乱が明かになると、残っていた将軍たちの側はその機に乗じて速やかに反撃に転じ、血塗れの徹底的な鎮圧を行なった。彼らが敵を根こそぎにするチャンスが広がったのだ。共産主義者やその他の左翼がその未遂に終わったクーデターの背後にいたと非難された。そのあとに起きたのは、何千人もの人間――子供や妊婦も含めて、とりわけ村落や小都市で起きた――虐殺だ。殺されなかったとしても、彼らは証明さえ必要ないとされた過ちのために集中キャンプや牢獄に放り込まれ、あるいは島流しにされた。これこそ、見境なく犠牲者とされた人々と、この国民の歴史上並ぶもののない残虐さによって記憶されつづけている、この国における人道にたいする冒涜であった。

プルラック[3]で生まれ成人したアブドゥラーは運が良かった。たった一年だけジャカルタの陸軍司令部に拘留されただけですんだ。逮捕されたとき、「再起すべく勢力を整えているアカどもの企て」とされるものに関与している仲間たちと彼がまだ関係を保っているという証拠は、彼の手元にはなかった。彼の財布には子供の学習ノートから破り取った紙が二枚入っていた。そこに彼の父は、オランダ時代の小学校で身につけた、独特の筆跡で綴っていた。文字を書き慣れないことが見て取れたものの、力強い文字のうねりだった。最初から最後まで、筆跡は変わっていなかった。

その手紙は、父と母が、満月が三度ヤシの葉の向こうに上るだけの時間がかかる船旅でハジの巡礼に出掛けることを伝えていた。彼ら以前の信心深い人々と同様に、当時まだ長くかかった聖なる旅路に、両親は死ぬ覚悟で向かった。聖なる死である。それが、石の重しで海の底に沈められて葬られることを意味するのであれ、カラカラに乾燥したアラブの地に墓標もなしに、名前も記されずに埋葬されることを意味するのであれ。その手紙の中ではまた、家とヤシ農園という形の財産を、残されるアブドゥラーと兄弟たちの間で分割することも説明されていた。

両親の神聖なる意志は、その遺言状のインクが乾いてから程なく、恩寵によって報われることとなった。すでに聖なる旅路で死ぬ覚悟をしていたその二人の巡礼者がウレレ港[4]から出港

---

3 アチェ東部の町。

4 バンダ・アチェにある港。

する前に、その遺書は彼らの子供、遠くジャワの地を彷徨っていたアブドゥラー・プルラックにとって救いの神となったのだ。

アブドゥラーはちょっと戸惑った。彼を軍の留置所に放り込んだ政治的信念と宗教のあいだに何の関係があるのか、いくら考えても分からなかった。今に至るまで、まだ彼の耳には響いている。両親との長い議論のあとでも、彼は映画労働組合の活動家になる意志を曲げなかった。彼が簡単に銀幕の世界に飛び込める方法が他にあっただろうか。両親が折れた。その全く正当な彼の希望を認めたものの、しかしそれも、むしろ交換条件と言ってよい言葉を添えてであった。「良いだろう。ただ、礼拝は忘れるな。祈りなさい。」

彼を調べていた取調官たちは、その遺書が、彼らの拘留者、すなわち中背でウェーブした髪で、鋭い目付きをし、頭骨に落ち込んだ二つの眼球、薄い唇と高めの鼻をし、共産主義者の影響下にある映画組織のメンバーであることを包み隠さず認めているその青年を長々と拘留しておく必要がないことの証と見なした。長く拘留すれば、拘留者たちが彼らの行なった「政治犯罪」への報復として受ける責め苦を喰らえるように生かしておくために用意された、砂の入った米の配給分が減るだけだったからだ。

「ドゥル…、お前は帰っていい。お前がどこに行こうが俺たちには知ったことではない。アチェに帰ろうと、お前の両親のところに帰ろうと、あるいはこの前俺たちがお前をとっ捕まえた家に帰ろうと、どうでもいい。俺たちの知ったことじゃない。ただ、忘れるなよ、一週間に一度、お前はここに報告に来なければならない。いつまでかは、お前は尋ねる必要はない。俺たちは軍人で、これは決定だ。もう余計なことはするな。大人しくしてろ。お前を解放して、もうお仕舞いだ。分かったな…？！」こうして彼は、キャンプから引き摺り出された。

本当は、その決定を聞いた瞬間、心のなかでは僅かの喜びもなかった。彼はその予想もしなかった現実に直面して、怖れおののいた。彼がその決定を拒否できないことは明らかだった。受け入れなければ、抵抗したと責められ、拷問を受けなければならないだろう？！　彼の心は傷付いた。問題は、同じ政治的災いに苦しみ運命を共にする仲間たちから引き離されることだった。その軍の権力者の決定を、彼らが拘留している人間の精神をズタズタにする戦略の一部だと彼は考えた。彼は故意に仲間から引き離されたのだ。彼は、自由な世界で一人ぼっちにされ、一人の知り合いもいなかった。仲間は皆、収容所か牢獄の住人となっており、死んでいないとしてもどこにいるのかも知れぬ身だったのだから。一方、彼は解放され、一時的に自由の身となった。彼が後に残してきた者たちには、様々な拷問や病気に耐えなければならないものが多くいた。例えば、二日前にはタンゲランの牢獄でコレラによって十数人の拘留者が死んだという知らせを耳にした。その伝染病はまだ猛威を奮っていた。その牢獄で人間の命の上に君臨する者たちは気にもしなかった。薬が用意されたという話もあったが、薬をこっそり忍び込ませて、それが夫であれ妻であれ、子供であれ親戚であれ、塀のなかに放り込まれた者の命を助けたのは、拘留者の家族自身だった。

収容所を出て百歩のところで、アブドゥラーは振り返りたくなった。しかし、振り返らなかった。今や彼は、権力者が彼に与えたばかりの自由な環境で、彼の人生に付いて廻る一つの問いの答えを見付けるために奮闘しなければならなかった。即ち、どこに行くべきか？　放たれたばかりの鳥がはばたくように、息苦しい集中キャンプから解放されたあと、どこで羽を休めるべきか？　彼が捕まった家は、もはやありえない。その家は組織の事務所だったから、当然のことながら軍に占拠されている。他の組織の所有権も同じことで、この国を包み込んだ騒擾において

自分が勝ったと考える者たちに強奪されていた。味方は、はるか海の向こうだった。一方で、友人達は、その暗闇がどこまで続くのか分からない牢獄に取り残され、ただ解放を待ち焦がれていた。幸薄き若人よ、君はどこに行きたいのか？

ようやく彼は自分を奮い立たせ、振らつく足を引き摺って、かつて彼が下宿していたチキニ周辺の家に向かった。行ってみる、その大きな家に住んでいるのは下宿のおばさんだけだった。彼女によると、ある晩、下宿人は皆、私服姿の人間数人と完全武装した軍人一部隊に連れられていった。彼らは軍のトラックに乗せられ、どこかに連れ去られた。それから、アブドゥラーの膝に口付けするかのように屈んで、その下宿のおばさんはどうか二度とそこに来ないように懇願した。軍を刺激してその家が接収されないように。家主の身の安全のために。近所の人たち、皆の安全のために、二度と来ないでくれと請うたのだった。

アブドゥラーはしばらく考え込んだ。自分が、二揃えの服を包んで担ぎ、財産はその身一つしかない、成長中の若者ではなく、むしろあらゆる人の視界から排除されなければならない、年老い草臥れた癩病患者のように感じられた。打ちのめされて、彼は家主を後にし立ち去った。

そして彼の放浪が始まったのだが、それは、以前固い決意をもって、映画俳優になるべくジャカルタに賭け、プルラックを去ったときには想像もしなかったものだった。ハリウッドのオーソン・ウェルズとはいかなくとも、『メダンの子供』のザイナル・アビディン[5]くらいならば十分だと思っていた。けれども彼が出会った生活は祝祭の場ではなかった。今や彼は、マンガライやジャティヌガラ、あるいはベオス[6]で修理を待つ壊れた客車や、ガルル地域やプラネット・スネン、コタ・パリス[7]で売春のために貸し出されている小屋の横で夜を過ごしているのだ。何ヶ月も独立記念塔周辺の排水路の住人となったこともあった。幾度かは、乞食や売春婦に対する一掃作戦で捕まり、スルポン[8]の牢屋に放り込まれた。一銭の価値もないかのように扱われたアブドゥラーや数十人は、それから、アスファルトの端や石だらけの路傍を這って、再び自らを首都の道々に委ねていった。他のどこに行けようか、これが彼らの生きる唯一の選択なのだ。

まだ思考停止していない頭で、どうすれば餓死しないかと出口を探した。映画会社に職を求めるのはもう不可能だった。共産党を再建するために浸透しようとしていると通報され、再び牢獄に放り込まれるか、殺されるかするのが落ちだ。彼は、齢二十五にして、自分が映画人として達成したのは、たった一本の映画——それも白黒だ——の脇役でしかないことを認めざるを得なかった。扉は既に閉じられた。しかも堅く。彼の夢は死に絶えた。自然から授かった、人目を魅く鋭い目を持つ整った顔立ちと、俳優として十分な知性は、有無を言わさぬ時の流れに屈するしかなかった。

スネン市場を出入りする人を眺めているうちに、彼は買ったものを運ぶ手伝いをしはじめた。野菜でいっぱいの籠を二つ担いでいたおばさんに初めて荷物運びを申し出たときは、恐しく、

---

5 ザイナル・アビディン（Zainal Abidin, 1928 -- 2000）は、1950 年代半ばから 1990 年代初頭まで活躍したインドネシアの俳優。『メダンの子供（Si-Anak Medan）』は、1954 年封切りの『メダンの娘（Putri dari Medan）』を指している可能性が高い。

6 ベオス（Beos）はジャカルタ・コタ駅の別名。マンガライ、ジャティヌガラもジャカルタにある鉄道駅で、車両基地に近い。

7 いずれも中央ジャカルタ、スネン（Senen）地区にある繁華街。

8 ジャカルタ郊外、現在のタンゲラン市にある地名。

不安で、胸がどきどきした。おそらく彼の正直な目を見て、そのおばさんはにっこりと微笑んで、彼の申し出を受け入れ、運んでいたものを彼に背負わせた。彼は後からそのおばさんの後を付いていった。鉄道のレールを渡り、小径を出入りし、ブングル地域に着いた。そのおばさんは、やや人通りの多い道沿いにある家に住んでいた。彼女は、家の前部を占める食堂で生計を立てていたのだ。その家には二人だけ、つまりそのおばさんとその娘だけが住んでいた。

市場の隅に打ち上げられた不幸な俳優の手伝いを利用する買い物客がいるかは、計算できなかった。ただそのブングルの女性は違っていた。幾らかの駄賃を与えるだけでなく、アブドゥラーに食事を与えてくれたのだ。アブドゥラーがそのおばさんの買い物を十回も運ばないうちに、彼の心は食堂に釘付けになった。温かく甘いお茶を添えた一皿の御飯を持って来てくれたばかりの娘の目を、こっそりと、ガラスの裏から彼は盗み見て楽しんでいた。纏わり付く蠅もいなければ、邪魔な砂埃もなかった。しかし、ある朝、そのガラスの向こうで輝く娘の目が、穏かな視線を送り返してきた。まるで自らを委ねるかのように。瞬きが呟いていた。「あなたの感じていることを私も感じているわ。あなたが良ければ、あなたが行くところどこにでも私を連れていって…」と囁こうとしているかのように。

そのように見詰められて、今や浮浪者となっていた俳優の喉に唾液が絡まった。恥かしさを堰き止めようとするかのように、彼は視線を床に落とした。彼は、そのガラスの向こうで娘の目が語るほどに人生は生易しくはないと思った。愛はいつも岐路を用意する。誠実か、不誠実か。いったいどちらを選ぶか？　彼の心は千々に乱れた。しかし、勘違いしないで欲しい。彼は拒否したわけではないのだから。その食堂の娘の目は、無視するにはあまりにも素晴しく、愛で慈しまずにはいられぬほど魅力的だった。以前、何千組もの目を彼は中学校のときや映画の撮影時に見てきた。産毛の生えた、この朝食を運んでくれた手の持ち主の目は、ガラスの向こうに神の啓示が滴るかのように、あまりに魅惑的で、あまりに完全に輝いていた。

彼の目は床に釘付けになったままだった。心臓は高鳴っていた。アブドゥラーはその眼差しにすっかり気後れし、ただその場を去ったのだった。御礼も言わず、挨拶もなしに。今や彼は、先日集中キャンプから放り出された後、第二の闘争に入った。その恐るべき眼差しを受け取るのか、あるいはただ忘れるか。そして、ブングルのおばさんの荷物をいつも担いでいた人夫をすっぱり止めるか。しかし、何ヶ月も希望を失しなって漂流していた船乗りにとって、投錨できる陸地がちらりと見えることほど期待させるものはない。それゆえ、四十一日目にはもう、そこに食事に来た最後の客が帰ったあと、そのプルラックの独身男がその娘と二人並んで座っている姿が見られるようになった。

六十日目にはその恋人ふたりは酔っているようにベチャのシート上で揺れながらシトゥ・レンバン公園[9]に向かった。そこで、風に吹かれて垂れ下った灌木の葉が波立たせる水に二組の足を浸しながら、いつまでも、その娘の目は見つめられ、褒められ、抱き寄せられるのだった。デワンガはそのように彼女を褒めそやす人間の心の流れに、自らも流されるままにした。時に彼女が、身を委ねるかのように目を瞑ると、そのプルラックの若者の欲望はますます渦を巻き、彼の腕のなかにある娘をどこかの高みへと飛ばしてあげたくなった。恋はここまでにしておくべきです、男性諸君。しかしながら、そのカップルは我慢しきれなかった。七十日目の夜、おばさんが東ジャワのムンチャルに里帰りしたとき、彼らは互いへの愛しさに流され、恋の節度も破れ

9　ジャカルタ、メンテン地区にある公園。

去ってしまった。彼らは欲望の炎に身を焦し、恋は後に置き忘れられていた。田舎で神話となっていた一滴の初夜の血を、彼は青一色のシーツの上に見なかった。けれど、それはアブドゥラーにとって問題とはならなかった。その血はどこで滴ったのか、誰が彼女の処女を奪ったのか、彼の猜疑心が駆り立てられることはなかった。アブドゥラーにとって、それは単にデワンガ、自らの心を停泊地として与えてくれた恋人個人の所有権の問題であった。その所有権を訴える権限は、どこからのものであれ、なかった。むしろアブドゥラーは、快楽の頂点で果てたあと、もっとも温かくもっとも長いキスをした。彼はまた心をくすぐる愛と思い遣りの言葉を囁いた。そのような態度は、女性を単なる道具としてしか扱かわない男性には決して見られないものだった。

デワンガが月のものが来なくなって二ヶ月になり、そして早朝に眩暈に襲われ吐き気を催すと、彼女の母親はひどく喜んだ。喜びから彼女はアブドゥラー・プルラックを長々と抱き締めた。アブドゥラーはその行為を、その小さな家族の一員として歓迎されているものと解釈した。彼は、その抱擁をデワンガに起きたことに対する責任の要求とは感じなかった。彼はそれを受け入れねばならぬ運命、そして優しく応えるべき愛と考えた。

ブングルのおばさんは、すぐに職人を呼んだ。家全体を、前の食堂も含めて、塗り直すよう頼んだ。もっとも近い親戚が数人ムンチャルからやって来た。それから、その食堂は丸一日休みになり、プルラックの子アブドゥラーとムンチュル出身の娘デワンガの質素な結婚式の会場となった。おばさんが結婚宣誓の儀式のために上着を買ってあげようとすると、アブドゥラーは丁重に断わった。彼は自分で買った水色の長袖シャツと黒いパンタロンを着たかったのだ。今や彼は、おばさんの手伝いだけではなく、新たな収入源を得るため、ブングルから二キロほどクラマット・ラヤ通りの道端で、古本や、あるいは売れ筋の商品であれば何でも売っていた。

その食堂、おばさん、とりわけその娘のデワンガは、アブドゥラーにとって恩寵だった。空腹はすでに過去の問題となっていた。そのワルン付きの家は居心地の良い住処となった。生活は徐々にではあるが、上向いていった。そんな状態が、ある映画業界の人間が道端で偶然彼を見掛け、再び映画の世界に飛び込まないかと誘ったときまで続いた。我が身の安全について長く考えたあと、彼はその誘いを受けた。最初は台本校閲者として働いた。数年後には信頼を得て、劇場映画であれテレビドラマであれ、台本を書くようになった。自尊心は回復しはじめたようだった。月に一度はまだ軍司令部に報告しに行かなければならなかったけれども。

これは避けられないことだが、妻にも義母にも知られることなく済ませた。彼は東ジャカルタの方に質素な家をローンで買えるまでになった。今日、アブドゥラーと妻、二人の娘、そして病気がちな義母がそこに住んでいた。ブングルの食堂は他人に貸した。今やその四人の生活を支えるのは、アブドゥラーだった。

生活レベルの変化は、ときに疑念を起こさせる新たな空気を醸し出した。妻デワンガは、疑念を抱かせるものをよく見付けた。三十二年続いた体制の権力が崩壊した後、アブドゥラーはよく客の訪問をうけたが、夫との話し振りからは古い知り合いだという印象を与えていた。あるとき夫のもとに友人が訪れたが、彼はシバラニという名字で、かつてドイツの音楽学院で学んだ指揮者であった。一九六五年の政治的災いが起きたとき海外におり、帰国できないままオランダに留まらざるを得なかった詩人、アガム・ウィスピが訪問したこともあった。

また彼女は電話を取り、相手がソブロン・アイディット[10]を名乗ったこともあった。俳優ザイナル・アビディンが亡くなったことを電話で知らせてきた人が、少なくとも三人いた。このアブドゥラー・プルラックとは本当は何者なのかとデワンガを訝らせる来客は更にたくさんあった。母がスネン市場で拾ってきた若者、そして男前で優しいが貧しい男は何者なのだろう。

そして、デワンガが飲み物と御茶請けを持っていったとき、アブドゥラーがある政治的な話の内容を止めるよう客人に目配せをしつつ、デワンガの方に目を動かして話が妻に聞かれてはならないことを示すのを目にしたことも一度や二度ではなかった。彼女は違う人間だから。違うグループの出だから。どのグループなのか、彼女には分からなかった。

しかし、デワンガは不安な気持ちをアブドゥラーに伝えることはなかった。事実、一人の妻として、日々の生活のなかで夫が愛情と責任を示しつづけていることは証明する必要さえなかった。彼らの二人の娘が大人になっても。そして三十年前ブングルの食堂のガラス窓越しに初めて目が会ったときから、アブドゥラーは誠実で、デワンガへの愛情は変らず温かいままの人間だった。とりわけ、つねに一番の魅力となっていた彼女の目への愛情は。

そうした馴染みのない客が次々やって来たことで、デワンガは彼らの家族生活における一つのエピソードを思い出した。あるとき、学校の課題だからと、彼らの娘の一人にルバン・ブアヤの博物館[11]に連れて行ってくれるよう頼まれた。

一九六五年に起きた将軍たちの殺害を描いたジオラマを見て回ったあと、その子はこう結論付けた。「PKIはすごく残忍なのね！！」母親は静かに頷いた。一方、アブドゥラーは冷い声で、修正したいかのように答えようとした。そして、聞こえてきたのは、「そ、そうだな…。ざ、残酷だね。」という絞り出した声だった。

夫の心のなかに何があるのか質そうという気は微塵もなかった。彼女は問い質すことで、アブドゥラーの愛と献身が揺らぐのを望まなかった。

その病室のぼんやりした蛍光灯の光、真っ白に塗られた壁、磨りガラス、クロロフォルムの匂いが、空気をますます重苦しくした。妻の横で言葉を吐き出すと、アブドゥラー・プルラックはデワンガの手を撫でながら、先程彼の話を聞くあいだ閉じられていた彼女の目にキスした。

「話したいことはもう話したよ。母さんを騙していたことになるなら、許してほしい。もしエワを騙していたなら、すまなかった。エワ、君に出会ったとき、僕は丁度G30S[12]で拘留されて出てきたばかりだったんだ。」アブドゥラーは胸の苦しみと格闘しているようだった。しばらくの間、彼は身動きせず、ベッドで横になっている妻の反応を待っていた。

デワンガは、頭をすこし傾け、アブドゥラーを見ようと瞼を開けた。その眼球に悲しみは見えなかった。彼女はじっと見詰めた。微笑みながら言った。「ずっと、あなたは私の目のことばかり

---

10 1934～2007。かつてのインドネシア共産党書記長 D. N. アイディット（D. N. Aidit）の弟で、詩人、作家。1965 年 9 月 30 日事件当時、中国で働いており、インドネシアに帰国できなくなる。後にパリに定住し、その地に没した。

11 1965 年 9 月 30 日事件で、拉致された陸軍将軍たちが拷問・殺害されたとされる場所。現在は記念公園となり、博物館があり、児童・生徒が社会科見学によく訪れる場となっている。

12 陸軍将軍らを拉致・殺害した陸軍部隊が名乗った「9 月 30 日運動（Gerakan 30 September）」の略称。

構ってくれたわね。ありがとう。」弱々しく自分の手をアブドゥラーの手から離し、萎んで平たくなった乳房のあたりに指を滑り込ませた。「このペンダントを見てみて。あなたは知らなかったでしょうけど、そこには蓋を開けるボタンがあるわ。いま開けて見てみて。」そう呟いた。

アブドゥラーは驚き押し黙った。その飾りを持つと手が震えた。そして、その蓋を開けると、緑色の三日月のような絵が見えた。しかし、一方の端には握りがあるようだ。赤くな滑らかな地にきれいな象嵌が施されている。そのシンボルは、それ自体魔力を持っているかのように、アブドゥラーの頭を垂れさせた。いまや彼はそれが農民運動のシンボルであることを思い出した。一個人が所有を許される土地は五ヘクタールを限度とする、という農業基本法を実行に移すために、一方的行動[13]を起こした農民運動だ。それ以上の土地は土地を持たない農民に奪われる。その鎌の一種をシンボルとする旗を掲げた農民組織こそが、行動を指導したのだ。後に、農村で過剰に持つ者と貧困にあえぐ者たちの間に鋭い対立を引き起こした運動だ。

「エワが十七歳のときそのコインのペンダントを首に掛けてくれた、温かい愛情のこもった父の指を感じるの。一九六五年に悪い地主が送り込んだやくざ者が来て、父を連れ去ってから、父は戻ることはなかった。それから母と私も拘留されたわ。そして、キャンプの司令官が力づくで私と寝たことで、私は自由になったの。」

その言葉自体が、生涯でもっとも傷付いた過去へと彼女の思考を引き戻し、萎れて薄くなったデワンガの胸を、激しくなる心臓の鼓動で締め付けた。突然取調室の隅に軍服を脱ぎ捨て、狂ったように自分を引き寄せ、素っ裸にした司令官の顔が頭に浮かぶと唇を噛み切りたい気持ちになった。大人になったばかりのデワンガは、その薄汚い権力を象徴する人間が彼女の股間に足の親指ほどの肉の固まりを突き刺したとき、押し殺した叫びをあげた。それから、屈辱的なことに、彼女は隅で咽び泣くままにされた。太股の間に滴る血と痛みと、その軍服を着た人間の欲望に満ちた誘いを拒否したために殴られ青くなった両目の刺すような痛みに耐えながら。そして、側で微動だにしないアブドゥラーを見て、その軍服の男の残忍さと、彼女がその夫から受けた心からの労りが、なんと比べようのないものかが、分かるのだった。その夫の腕のなかで、彼女は本当に女性として敬われた。そして、デワンガに愛のアプローチをする度、アブドゥラーの姿勢はなんと立派だったことか。彼は身を委ねるように、一緒に達するまでずっと付き添い、どちらも絶頂に達せずがっかりすることはなかった…。夜の帳とともに始まる彼らの愛の営みのあと、数え切れないほど、夫は彼女の足の指に接吻し、夜明け前の水浴をさせ、全身を撫ぜてくれた。そのすべてを思い出すと彼女は血が逆った。神ほどにも高い愛と、比べるものもないほどの残酷さを照らし合わせると。

クロロフォルムの匂いと弱々しく光る蛍光灯がその病室の雰囲気をますます固くした。

---

[13] 1960 年に成立した農業基本法（Undang-Undang Nomor 5 Tahun 1960 tentang Peraturan Dasar Pokok-Pokok Agraria）および農地面積規定法（Undang-Undang Nomor 56 Prp Tahun 1960 tentang Penetapan Luas Tanah Pertanian）により個人の所有する農地は、人口密度によって水田は 5～15、畑は 6～20ha に制限された。しかしその実施が遅れたため、共産党傘下の農民戦線（BTI, Barisan Tani Indonesia）の指導の下、地主の農地を一方的に占拠、小作農・農業労働者に分配する一方的行動（Aksi Sepihak）が行なわれた地域があった。

デワンガは夫の目の奥を見詰めた。彼女は夫の手を取り、胸に運んだ。「あぁ、あなた。私を許して。母さんも許して。そして、信じてください。あなたが私を妻にしてくれて、私は本当に誇らしいの。あなたの妻になって後悔なんてしていないわ。まったく。髪の毛の千分の一もよ。」

夕刻の闇が外を覆いはじめた。デワンガは瞬きをして、目を閉じた。

Martin Aleida, “Leontin Dewangga,” *Leontin Dewannga* (Jakarta: Kompas, 2003), hal.23-42.

国民的トラウマを描く物語

―マルティン・アレイダの短編に見る歴史の語り―

高地 薫

歴史を描く文学

今日もなお癒えないインドネシアの国民的トラウマの要因となっている九月三〇日事件（九・三〇事件）から約半世紀が経過した[14]。九・三〇事件は、1950～60 年代国際的には非同盟運動の指導者として、国内では建国の父としてカリスマ的人気を持っていたスカルノ大統領が権力の座から失墜する契機となった事件である。1965 年 10 月 1 日未明、ウントゥン中佐率いるチャクラビラワ大統領親衛隊の部隊がアフマド・ヤニ将軍らインドネシア陸軍トップの将軍たちを拉致・殺害すると共に、インドネシア国営ラジオ局を占拠し、自らの運動を「九月三〇日運動（Gerakan 30 September）」と呼び、陸軍内の「将軍評議会」が計画していたスカルノ大統領に対するクーデターを未然に防ぐために決起したと説明する宣言を放送した。この運動は、即座にスハルト少将率いる陸軍が掃討したのみならず、つづいてジャワ島、バリ島を中心に共産党狩りが起き、数十万人の共産党員やシンパ,あるいはシンパと見做された人々が、治安部隊および一般の人々に殺され、更に多くの人が当局によって「保護」の名目で投獄された。このような人々は、獄を解かれた後も「元政治犯（ex-Tapol）」として腫れ物のように扱われ、政治的にも社会的にも差別されつづけてきた。更に、この事件を契機として、九・三〇運動を鎮圧した陸軍少将スハルトがスカルノから権力を奪取すると共に、それまで 300 万人の党員を誇り、非共産圏最大の共産党だったインドネシア共産党は永遠に物理的に葬り去られることともなった。

この陸軍首脳を拉致・殺害した事件は、その後成立したスハルト体制下ではインドネシア共産党（Partai Komunis Indonesia, PKI）による組織的・計画的なクーデター未遂事件とされ、事件後に起きた、共産党員やそのシンパとされる人々への虐殺や法的プロセスを経ない拘禁もその解釈に基づいて正当化され、不問とされてきた。1998 年にスハルト体制が崩壊し、民主化が開始されると、スハルト時代に起きた政府・国軍による人権侵害事件の見直しが求められ、とりわけアブドゥルラフマン・ワヒド政権によって事件後の人権侵害の被害者と加害者（国を含む）との「レコンシリアシ(和解, rekonsiliasi)政策」が打ち出された。一方、スハルトを英雄視した公的史観、歴史叙述も批判の対象となり、九・三〇事件後の虐殺・拘禁も再び見直されはじめ、とりわけ歴史学および歴史教育における歴史叙述の問題に関しては、批判の中心的トピックの一つとなった[15]。

この歴史的事件後の虐殺・人権抑圧は、同じ国民同士で行なわれたが故に極めてセンシティブな問題でありつづけているが、また、多くの文学作品に取り上げられているトピックでもある（高地 2010；Kochi 2015）。こうした作品の著者には、同時代を生きた作家、自分自身や身近

14　九・三〇事件については、日本語では倉沢（2014）や千野（2013）を、英語では Roosa (2004)を参照されたい。

15　歴史教科書における九・三〇事件に関する叙述と、それを巡る政治的混乱は、Kochi (2013)において議論した。

な人が事件に巻き込まれた者、あるいは後年この歴史的大事件を取材した者など様々である。本論で取り上げ、短編小説日本を紹介するマルティン・アレイダ（Martin Aleida）は、自身が左翼運動に参加したために当局に逮捕、投獄されたことのある元政治犯である。

マルティン・アレイダとその作品

マルティン・アレイダは、1943 年 12 月 31 日、北スマトラのタンジュン・バライ（Tanjung Balai）に生まれた。この名前は筆名であり、もともとはヌルラン（Nurlan）という名前だったという[16]。出身地から判断しても、2000 年代末に *Tapian* というバタック文化を扱う雑誌の副編集長をしていたことからも、民族的には彼自身がバタック人、あるいは両親のいずれかがバタック人である可能性が高い[17]。彼の教育的バックグラウンドについては情報が錯綜しており、確定はできないが、かなりの英語能力は身に付けたようである。確実なのは 1960 年代にジャカルタに出ると、共産党系の左翼運動に加わり、共産党の機関紙『ハリアン・ラヤット（*Harian Rakjat*、人民日報）』の記者となり、そして共産党傘下の文化団体レクラ（Lekra, Lembaga Kebudajaan Rakjat、人民文化協会）の雑誌『ザマン・バル（*Zaman Baru*、新時代）』の編集部に加わったことである。

そして九・三〇事件の後、当然の如くマルティンは共産党狩りの対象となったが、二つの「幸運」に彼は護られた。一つは、殺されずに逮捕・投獄されるだけで済んだことである。二つは、たまたま持っていた父からの手紙のおかげで、早々に釈放されたことである。つまり、敬虔なイスラム教徒である両親はメッカへの巡礼に出発するのだが、その前に、万が一に備えて息子であるマルティン（当時はヌルラン）に遺書を送っていた。尋問中にその遺書を見付けた軍人は、「宗教を持っている」という一点のみで、彼を釈放したのだ。この経験は「デンワガのペンダント」の主人公アブドゥラーに投影されている。また、インドネシアで民主化が始まってすぐ 1999 年に発表した『あの凧はもう高く舞い上がらない』(Aleida 1999)においても同じエピソードが用いられている[18]。

そうして「解放」された彼は、元政治犯に義務付けられていた定期的な軍への所在報告をすると同時に、仕事を探さねばならなかった。そこでまず彼は、身元が分からないように、敬愛するマルティン・ルーサー・キング牧師のファースト・ネームを貰い、マルティン・アレイダと名乗るようになった。そして、新しい名前をつかって再びジャーナリズムの世界に戻り、一時はインドネシアを代表する隔週ニュース誌 *Tempo* の記者をしていたが、当局に“正体”を知られ、職を

---

[16] Lie 2010. また Moriyama(2017,)は、もとの名を Nursan としているが、これは誤植の可能性が高い。インドネシアは改名が比較的容易なため、現在、彼が生まれたときの名を現在も住民登録に用いているかは不明である。

[17] 2009 年 3 月 14 日、イスマイル・マルズキ公園（ジャカルタ）における本人へのインタビューによる。バタック人であれば氏もあるはずだが、これも不明である。

[18] ちなみに、同時期に投獄されたバリ人の詩人、プトゥ・オカ・スカンタ（Putu Oka Sukanta）はバリ語の詩を書いたメモを見付けられ、これを暗号と見做されて、却って酷い拷問を受けたという。彼もまた自身の小説『尊厳を紡ぐ』（Sukanta 1999）でこの体験を描いている。2007 年 5 月 4 日、ジャカルタ、プトゥの自宅でのインタビューによる。

辞さざるを得なくなった。その後、NHK とも仕事をし、1986 年から 2001 年はジャカルタの国連情報センターで、日本人上司の下で働いていた[19]。

作家として

小説家としてのキャリアは、九・三〇事件の後から始まったようだ。処女作は、女性主人公とジュリという犬を描いた 1969 年の「ジュリ、もう戻ってきちゃだめよ」(Aleida 1969)であり、第二作が、今回翻訳した「灰色の夜(Malam Kelabu)」(Aleida 1970)である。この短編小説第二作は、二つの点で特殊である。九・三〇事件では陸軍の将軍たちの血が流れ、事件後に翌年、地域によっては 60 年代末にかけては共産党員およびそのシンパと見做された人々が大量に虐殺された。その血腥い記憶も生々しい 1960 年代末から 1970 年代初頭の時期に、十数点の短編小説が『ホリソン(Horison、地平線)』および『サストラ(Sastra、文学)』の二誌に掲載されている[20]。「灰色の夜」はこうした作品群の再末期の作品である。これが第一点である。

第二に、こうした作品群の著者のなかで、実際に政治犯として拘束・投獄を経験したのは、マルティンだけである。「灰色の夜」が掲載された時期、『ホリソン』編集部はモフタル・ルビス(Mochtar Lubis、小説家、ジャーナリスト)、H. B. ヤシン(H.B. Jassin、文芸批評家)、ザイニ(Zaini、画家)、タウフィック・イスマイル(Taufiq Ismail、詩人)、アリフ・ブディマン(Arief Budiman、社会学者、文芸批評家)、グナワン・モハマド(Goenawan Mohamad、詩人、ジャーナリスト)であり、1960 年代に共産党傘下の人民文化協会と対立関係にあった者たちだった[21]。彼らのうち、マルティンが何者かを知っている人間がどれほどいたのかは不明だが(後に自らの主宰する『テンポ』で彼を記者として雇ったグナワン・モハマドは真実を知っていたかもしれない)、少なくとも H.B.ヤシンは承知しており、この作品は彼を通じて掲載されることとなった[22]。

中部ジャワ、ソロ河近くの農村を舞台にしたこの作品には、作者自身の体験、そして周辺の人々から聞いた実話が織り込まれている。ジャワ島は世界トップクラスの人口過密地域であり、また火山性の肥沃な土と豊かな水を基盤とした農業地帯である。そして、とりわけ中部ジャワと東ジャワの農村は、共産党の地盤であり、共産党傘下の農民戦線(Barisan Tani Indonesia, BTI)の活動が活発な地域だった。マルティンの妻は中部ジャワ出身であり、彼はその故郷で誰からとなく、周辺で起きた悲惨な事件を聞いていた。また、主人公アルマダの許婚パルティニ・ムルヨラハルジョの住むソロユダンという村も、実際のモデルがあるという[23]。大仰なエンディングを別にすると、パルティニとその家族を襲ったような悲劇は当時ではありふれたものだった。しかし、ソロユダンに向う田舎道で、道連れとなった村の助役との会話で、その悲劇が徐々に明らかになっていく下りは、この作品で最も魅力ある部分であり、また読者を遣り切れない気持ちにさせる。歴史書あるいは学術書では表現できない「歴史」があると言えよう。

---

19 Lie 2005、および 2009 年 3 月 14 日の本人へのインタビューによる。

20 これらの短編のリストや評価については、Hurip(1972)を参照されたい。

21 1960 年代前半の人民文化協会の主張と、それに反対する芸術家たちの主張については、Moeljanto and Ismail(2008)を参照されたい。

22 2009 年 3 月 14 日のマルティン本人へのインタビューによる。

23 2009 年 3 月 14 日のマルティン本人へのインタビューによる。

「灰色の夜」の後、1971 年には「僕は一滴の水」(Aleida 1971)を発表したが、その後、彼はしばらく小説を発表していない。しかし、小説を書くのを止めたわけではなく、発表せずに原稿をしまっておいたのだ[24]。先述の通り、その素性が当局に知られたために『テンポ』を退職せざるを得なかったことを考えれば、おそらく発表したくてもできなかったのであろう。

マルティンがようやく自作を発表できるようになったのは、1998 年にスハルト体制が崩壊した後であった。1998 年には処女作から第三作に書下し一編を加えた短編集(Aleida 1998)を出版、翌年には彼の作品で最も自伝的色合いの強い『あの凧はもう高く舞い上がらない』(Aleida 1999)を出版し、その後も精力的に作品を発表している。短編集としては三冊目にあたる『デンワンガのペンダント』(Aleida 2003)に含まれる書下しの表題作が、今回翻訳したもう一編である。

この短編集をコンパス社[25]から出版した際には一悶着あった。編集部はすぐに出版を承認したものの、販売部はマーケティング上出版するのに相応しくないと難色を示した[26]。2003 年出版ということは、スハルト体制崩壊から 5 年を経て、スハルト体制下で描かれてきた歴史の見直しが声高に叫ばれていたころである。そのような時代にあっても、コンパス社のような大出版社では、自国史における国民的トラウマを扱う作品を出版するのが躊躇われたようである。

短編「デンワンガのペンダント」では、癌に冒された妻デワンガと夫アブゥラーがデワンガの死を目前にして、お互いずっと隠してきた過去を告白しあう。アブドゥラーは、かつて共産主義運動に関わった元政治犯であることをなかなか妻に告白できない。スハルト体制下で「元政治犯」のラベルを貼られることは、言わば人非人扱いされるということだった。何十年も隠してきたその事実を、愛する妻に詳らかにすることで、妻からの信頼や愛が失しなわれるかもしれないのだ。遂にアブドゥラーが自らの過去を曝け出すと、今度は思いも寄らず、妻デワンガからの告白がつづく。

その妻からの告白において重要な意味を持つのが、「灰色の夜」にも登場したインドネシア農民戦線(BTI)であり、また 1960 年に成立した農業基本法がもたらした混乱だった。農業基本法(Undang-Undang Nomor 5 Tahun 1960 tentang Peraturan Dasar Pokok-Pokok Agraria)は、農村を票田とする共産党や他の左派政党が推進しようとした農地改革(Landreform)のための法律だった[27]。地主や有産階級を支持基盤とする他政党によってかなり骨抜きにされたとは言え、農業基本法の実施規則である農地面積規定法(Undang-Undang Nomor 56 Prp Tahun 1960 tentang Penetapan Luas Tanah Pertanian)により個人の所有する農地は、人口密度によって水田は 5～15、畑は 6～20ha に制限された。しかし、法律ができたことと、その実施には大きな隔りがあった。土地の集中が著しく、しかし、農地改革が遅れた地域では、農民戦線(BTI)の指導の下、地主の農地を一方的に占拠、小作

---

24 2009 年 3 月 14 日のマルティン本人へのインタビューによる。

25 日刊紙 Kompas や、出版社・書店 Gramedia 等を抱えるインドネシア有数のメディアグループの一出版社。

26 2009 年 3 月 14 日のマルティン本人へのインタビューによる。

27 農地改革と一方的行動については、Mortimer(1972)、Achdian(2009)、Kasdi(2009)を参照されたい。

農・農業労働者に分配するという一方的行動（aksi sepihak）が行なわれることもあった[28]。これにより、農村における持てる者と持たざる者の対立は先鋭化した。

そのような農民運動に、デワンガの父は関与していたのであろう。当時、連れ去られたということは死を意味した。そしてその妻子もまた、拘留の憂き目に遭う。その拘留からの開放の代価は、デワンガの純潔だった。九・三〇事件後の人権侵害にはこうした事例がしばしば聞かれる[29]。暴力が、社会的弱者に向かう典型的な例であろう。

マルティンは、農業基本法を「実施」するために共産党と農民戦線が進めた一方的行動を「合法」な行動であったと評価している。正しいことをした者が、虐げられることになったと主張する[30]。この作品に限らず、マルティンの作品には、農民戦線や一方的行動への高い評価がしばしば吐露されている。

そして、マルティンら元政治犯たちの発表したほとんどノンフィクションと言える小説からは、彼らの経験した「不当な抑圧」を知らしめるという意志が読み取れるのである。

歴史を描く文学をどう読むか

ここで問題になるのは、マルティンのこれらの作品のように、歴史的体験に基づいたフィクションの何をどのように捉えるべきか、である。Hoadley (2005)は、九・三〇事件以降の虐殺や政治犯の生活をととりあげた文学作品を最も包括的に扱ってはいるが、九・三〇事件以降の虐殺や共産党の活動,政治犯の生活に関する幾つかのテーマに、個々の作品のエピソードを振り分けて解説し、幾許かの解釈を付け加えるばかりである。この研究が目的とする,『インドネシア国史』の語りに抵抗する語り、あるいはインドネシア人の歴史に対する認識の抽出に成功しているとは見做し難い。しかしながら、この「語り」こそが、キーワードになるだろう。

マルティンらの文学作品は、歴史学や政治学とは違った文学、フィクションという場で、スハルト体制下で社会に浸透させられてきた歴史に関する語り、支配的な叙述に対す闘争を繰り広げているのだ。すなわち、彼らは現在における変革を求めて、フィクションを通して訴えているのである。それを研究対象とするには、フィクションに描かれている「歴史」を、学術的手続きを経て得られる「歴史」と照し合わせるのみならず、フィクションで「歴史」語られている時間と社会状況をも視野に収めなければなるまい。

更により批判的な視座からは、マルティンらの作品には描かれていない、等閑視されている「歴史」への配慮も必要となるだろう。2014 年に公開されたジョシュア・オッペンハイマー監督

---

[28] ただし、それまでの土地所有の携帯や土地集中度、共産党の浸透度などにより、一方的行動の発生は地域的に斑があったと予想される。1965 年以前には自らが指導した、誇るべき農民のための運動として共産党および農民戦線が喧伝し、1965 年以降には共産党および農民戦線が行なった無法行為として宣伝されたため、その実態は見えにくくなっている。

[29] アメリカの文化人類学者ロバート・エメルソン（Robert Lemelson）が制作したドキュメンタリー映画『40 年の沈黙（40 Years of Silence）』では、家族を守るために家族のもとを去り、町の有力者の妻にならざるを得なかった女性について、その息子が証言している。

[30] 2009 年 3 月 14 日のマルティン本人へのインタビューによる。

の『ルック・オブ・サイレンス(Look of Silence)』[31]に対する、グナワン・モハマドの「アディ(Adi)」と題する鑑賞後の批評[32]は大きな手掛りとなるだろう。「犠牲者であるラムリは何をしていたのか、共産党の活動家だったのか。そのことが殺人者たちにどのような意味があったのか。彼らは何者なのか。そのような暴力の系譜はどのようなものか、そしてどこに発するのか。権力機構の命令のみによるのか。殺人者たちが誇りつづける、あれほどの残忍さが個人や社会に憎しみの種もなしに、現出するだろうか」とグナワンは畳みかけるように問う。同じ問いは、マルティンの作品にも投げ掛けうるだろう。同様のことは、タウフィック・イスマイルも提起している。「彼ら(元政治犯たち)は、いつでも 1965 年 10 月から自分の話を始める。それ以前のことにはほとんど口を開かない。」[33]

マルティンが評価する「一方的行動」にせよ、より広く共産党を含めた政治勢力が 1965 年以前にどのような活動を行なっていたのか。これらの学術調査と共に、それらの活動が歴史叙述であれフィクションとしてであれ、いつ、いかなる社会的文脈のなかで語られるのか、そしてそこにはどのような意図があり、その意図はどのような影響を社会に与え得たか。こうした視点を持つことによってこそ、今回紹介した小説のような、極めて政治性の高い歴史小説を正当に評価できるだろう。

---

31 2012 年に公開された『アクト・オブ・キリング(The Act of Killing)』では、かつて共産党狩りで虐殺を実行した者たちが、その虐殺を再現(act)して見せるという衝撃的なスタイルと、その残忍さと反省や公開の不在によって衝撃を与えた。続編として制作された本作品では、かつて自らが生まれる前に、共産党狩りで兄を殺されたアディが、その死の真実と謝罪を求め、殺害者たちを訪れるというスタイルを取っている。この映画へのインドネシアでの反響については、高地(2015)で紹介した。

32 http://www.tempo.co/read/caping/2014/09/22/129522/Adi (2014 年 11 月 2 日閲覧)。

33 2013 年 3 月 31 日、ジャカルタでの自宅におけるタウフィック・イスマイルへのインタビューによる。

参考文献

Achdian, Andi. 2009. Tanah bagi yang tak Bertanah: Landreform pada Masa Demokrasi Terpimpin 1960-1965. Bogor: Kekal Press.

Aleida, Martin. 1969. "Djangan Kembali Lagi, Djuli," *Horison*, IV-7, hal. 202-204, 214.

----------. 1970. "Malam Kelabu," *Horison*, V-2, hal. 36-40, 63.

----------. 1971. "Aku Sepertjik Air," *Horison*, VI-7,hal. 210-214.

----------. 1998. *Malam Kelabu, Ilyana dan Aku (Kumpulan Empat Cerita Pendek).* Jakarta: Yayasan Damar Warga.

----------. 1999. *Layang-layang Itu Tak Lagi Mengepak Tinggi-tinggi*. n.p.: Emasipasi - Damar Warga.

----------. 2009. "Dewangga's Pendant." in Carolan, Trevor. (ed.) *Another Kind of Paradise: Short Stories of the New Asia-Pacific*. Boston: A Cheng & Tsui Company, pp.181-191.

Hoadley, Anna-Greta Nilsson. 2005. *Indonesian Literature Vs New Order Orthodoxy: The Aftermath of 1965-1966.* Copenhagen: NIAS Press.

Hurip, Satyagraha. 1972. "Pemberontakan GESTAP/PKI dalam Tjerpen2 Indonesia," *Budaya Djaja*, 45l, hal.86–104.

Kasdi, Aminuddin. 2009. *Kaum Merah Menjarah: Aksi Sepihak PKI/BTI di Jawa Timur 1960-1975*. Surabaya: Yayasan Kajian Citra Bangsa & Centre Indonesian Communities Studies.

Kochi, Kaoru. 2013. "Text on September 30th Movement in history textbooks: The 2004 curriculum and social reaction against it." unpublished paper at the Special Forum "Rethinking History, Politics and (Human) Rights in Indonesia" (organized by Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University), Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, November 30, 2013.

----------. 2015 "Consuming a National Tragedy: G30S in Indonesian Society," in Kurasawa Aiko and William Bradley Horton (eds.). *Consuming Indonesia: Consumption in Indonesia in the Early 21st Century.* Jakarta: Gramedia, pp. 211-224.

Lie Hua. 2005. "Martin Aledia: Writing as testimony on joys and grief," *The Jakarta Post* , Desember 4, 2005, http://www.thejakartapost.com/news/2005/12/04/martin-aledia-writing-testimony-joys-and-grief.html

Moeljanto, D. S. and Taufiq Ismail (eds.) 2008. *Prahara Budaya: Kilas Balik Offensif Lekra/PKI Dkk*. Jakarta: Institute for Policy Studies.（初版は1995 年出版。）

Moriyama, Mikihiro. 2017. "Textual Production in the Midst of Political and Social Changes in Indonesia: Reading of Ajip Rosidi's Anak Tanahair," in Jan

van der Putten, Monika Arnez, Edwin P. Wieringa and Arndt Graf (eds.). *Traditions Redirecting Contemporary Indonesian Cultural Productions.* Cambridge Scholars Publishing, pp. 161-174.

Mortimer, Rex. 1972. T*he Indonesian Communist Party and Land Reform 1959-1965*. Ithaca: Center for Southeast Asian Studies, Monash University.

Roosa, John. 2006. *Pretext for Mass Murder: The September 30th Movement and Suharto's Coup D'etat in Indonesia*. Madison: University of Wisconsin Press.

Sukanta, Putu Oka. 1999. *Merajut Harkat*. Yogyakarta: Pustaka Pelajar.

倉沢 愛子, 2014,『9・30 世界を震撼させた日—インドネシア政変の真相と波紋』岩波書店.

高地 薫, 2010,『9 月 30 日事件を巡る文学と歴史」『インドネシア 言語と文化』16、75～94.

---------- 2015,「『ルック・オブ・サイレンス』再論～映画への反響と 9・30 事件に関するインドネシアの現状」『インドネシア・ニュースレター』No.90（2015 年 12 月 31 日）、25-30.

千野 境子, 2013,『インドネシア 9・30クーデターの謎を解く—スカルノ、スハルト、CIA、毛沢東の影』草思社.